

御父のように、いつくしみ深く

～いつくしみの特別聖年を歩む～

■はじめに

教皇フランシスコが公布された「いつくしみの特別聖年」が始まっています。聖年のモットーは「御父のように、いつくしみ深く」です。いつくしみとは、父なる神だけの態度ではなく、わたしたちもまた御父のように、いつくしみを生きようという呼びかけです。教皇は、この特別聖年を有意義に過ごすため、巡礼を行なうことだけではなく、信徒一人ひとりが日々の生活の中で、人を裁かないこと、ゆるしを与えること、社会において疎外された弱い人々に心を開き、慈善のわざを行なうことを勧めています。

京都教区は、2年にわたって、神が選んだ貧しさについて考えてきましたが、神のいつくしみというテーマは、貧しさと密接につながったテーマです。わたしは、昨年11月29日、待降節第1主日に発表した「いつくしみの特別聖年を迎えて」において、特別聖年の開催要項について書きましたので、この年頭書簡では、「神のいつくしみ」について、一緒に考えてみたいと思います。

注1. 「あわれみ」と「いつくしみ」は、あえて漢字表記をせず、ひらがな表記に統一します。

2. 引用の「大勅書」は、教皇フランシスコの特別聖年を公布する大勅書「いつくしみのみ顔」(Misericordiae Vultus)、「いつくしみ深い神」は、教皇聖ヨハネ・パウロ二世の1980年の回勅「いつくしみ深い神」(Dives in misericordia) のことです。

1. いつくしみの神との交わり

信仰の人格的センス

教皇フランシスコは、「いつくしみ、それはわたしたちの罪という限界にもかかわらず、いつも愛されているという希望を心にもたらすもので、神と人が一つになる道です」(「大勅書」2)と言われます。神のいつくしみは、キリスト教において、貧しさとともに、神とわたしたちとの関係の特徴づける重要なテーマです。天地の創造主である神は、被造物である人間をご自分の似姿として造り、かぎりない愛を注がれる方ですが、人間が罪を犯した後では、そのあやまちを気づかせ、ゆるすことによって、いっそう強くその愛を示されます。これが神のいつくしみです。

出エジプト記では、主はモーセに向かって宣言します。わたしは「**主、あわれみ深く恵みに富む神、忍耐強く、いつくしみとまことに満ち、幾千代にも及ぶいつくしみを守り、罪と背きと過ちを赦す**」(出エジプト 34・6～7)。旧約聖書には、契約に不忠実なイスラエルの民に対して、神がどれほど忍耐づよく、繰り返し、いつくしみとあわれみを示されたかが記されています。契約において、神は「正義と公平を与える」とともに、その態度を貫くために、ご自身を「いつくしみとあわれみの神」として啓示されたのでした(参照ホセア 2・21)。

このような神に対して、イスラエルの民は、「**主よ、わたしをあわれんでください**」(参照 詩編 4・2、6・3、9・14、25・16 など)という叫びをいく度となくあげ、「**神に感謝せよ、神はいつくしみ深く、そのあわれみは永遠**」(詩編 107.1)と、感謝と賛美をささげました。わたしたちも、いつくしみの神に信頼して、罪のゆるしを願い、神との深い交わりに与りましょう。

2. いくつかしみのみ顔イエス

信仰の発見的センス

神のいくつかしみを見出す場所は、御父から遣わされた御子との出会いの中にあります。特別聖年を公布する大勅書が「いくつかしみのみ顔」と題されているように、教皇フランシスコは「**イエス・キリストは御父のいくつかしみのみ顔だ**」と言われます。わたしたちは、神のいくつかしみを、イエスのみ顔によって知ることができます。御子を見る者は父を見るのです（参照ヨハネ14・9）。イエスは、そのことばと行いによって、父なる神のいくつかしみを表しています。イエスのうちに、いくつかしみを見る人、見つけ出す人にとって、神は「**あわれみに満ちておられる**」（エフェソ2・4）父として、特に「見えるもの」となられます（「いくつかしみ深い神」2）。

救おうとする人間のみじめさも自ら体験するために、神の子が受肉しました。イエスご自身が、いくつかしみの受肉なのです。いくつかしみということばが福音書に使われていなくても、イエスの行いはすべて、神のいくつかしみの体現に他ならなかったと言えます。イエスの使命は、ご自分の全生涯と最後の十字架上の奉獻をとおして、神のいくつかしみを御父の心として表わすことでした。いくつかしみの特別聖年に、聖書を読み、いくつかしみ深い御父と、イエスのいくつかしみのみ業を黙想しましょう。

3. イエスのように「あわれに思う」

信仰の認識的センス

イエスは、御父のいくつかしみの心を届けるため、ご自分がどのような人々のもとに遣わされているか、宣教の最初に宣言されました（参照ルカ4・18～19）。それは、貧しい人、生活手段のない人、自由を奪われた人、目の不自由な人、社会の不正のために苦しんでいる人々、そして、罪人とされた人たちです。注目すべきは、イエスがそのような人々の前に来られると、必ず深いあわれみの感情を覚えられたことです。福音書は、イエスがいやしの奇跡を行うとき、無感動なやり方でされたのではなく、「**あわれに思って**」行動されたと記しています。この「あわれに思う」のギリシャ語は、「はらわた・腸」を意味するスプランクナ（使徒言行録1・18）の動詞スプランクノマイが用いられています。「はらわたを突き動かされる」「内臓を引き絞られる」という意味です。岩波訳の聖書では、「腸がちぎれる想いに駆られ」とあります。まさに、旧約の神のあわれみを指すことば「ラハミム」（はらわたの意味）を引き継ぐ表現です。あわれみは、苦しむ人への共感となって、人間を深奥から動かします。イエスがファリサイ派の偽善を戒めたのは、あわれみの施しとして、内側にあるものを与えていなかったからでした（参照ルカ11・41）。あわれみは、利己主義や自己満足からのものではなく、正しい動機によるものでなければなりません（参照マタイ6・1～4）。真のあわれみは、イエスのように「あわれに思う」心から発するものです。苦しむ人への共感から、いくつかしみ深く行動しましょう。

4. あわれみ深い大祭司キリスト

信仰のキリスト論的センス

ヘブライ書でイエスは、「**あわれみ深い、忠実な大祭司**」（ヘブライ2・17）と呼ばれます。大祭司は、年一回あがないの日に至聖所に入り、神の前に民を代表して、いけにえをささげ、みずからの罪と全イスラエルの罪のあがないの儀式をしました。しかし、罪のないイエスは、わたしたちの罪をあがなうために、十字架の上で、御父のみ心にかなう生きた聖なる供え物として、ただ一度、ご自分をおささげになりました。その大祭司イエスは、**みずからも弱さを身にまとい**（ヘブライ5・2）、**わたしたちの弱さに同情できないかたではなく、罪を犯されなかったが、あらゆ**

る点においてわたしたちと同様に試練に遭われた」(同4・15)ことで、あわれみ深い大祭司と呼ばれるのです。苦しんでいる者を、上から下を見下ろす態度ではなく、弱さと罪の中で苦しみ叫んでいる、わたしたちのきょうだいとなった大祭司です。今年のお旬節は、御父が御子の十字架のあがないによって与えて下さったあわれみを深く黙想しましょう。

5. ゆるしの道具となりなさい

信仰の秘跡的センス

教皇フランシスコは、わたしたちキリスト者が、御父からあわれみを受けたものとして、御父のあわれみを示す効果的な「ゆるし」となるよう、「ゆるしの道具となりなさい」と諭されます(「大勅書14」)。わたしたちは、十字架のあがないによって、すでに神からあわれみを受けていることを忘れ、どうして人に対して傲慢で不遜な態度をとるのでしょうか。イエスは、仲間をゆるさない家来のたとえを始める前に、「七回どころか、七の七十倍までも赦しなさい」と、徹底的にきょうだいの罪をゆるし、あわれみ深い者であれと命じます(マタイ18・22)。そして、たとえの結びにこう言います。「**私がお前をあわれんでやったように、お前も自分の仲間をあわれんでやるべきではなかったか**」(マタイ18・33)。わたしたちは、自分では決して償うことができない「cf1」い負債を、キリストの十字架の死によって、いわば帳消しにさせていただいたのです。そのあわれみを受けたわたしたちが、自分に負債のある人をゆるすことはあたりまえだと、わかります。人間関係も社会関係も、正義だけの上に乗ろうとするとうまくいきません。確かに、自分に敵対し害を加える人をゆるすことには、苦しみと損害がともないます。だからこそ、御父からすでに、計り知れないほどのあわれみを受けている恵みを、忘れてはならないのです。パウロは、新しい契約のもとに、罪がゆるされ、神の恵みのもとに、新しいいのちを生きている証として、「**互いに親切にし、あわれみの心で接し、神がキリストによってあなたがたを赦して下さったように、赦し合いなさい**」(エフェソ4・32)と諭します。わたしたちも、人を裁かないとか、処罰を差し控えるといった消極的な態度だけでなく、より積極的に、相手をゆるし、相手に善を行うという「ゆるしの道具」となりましょう。

6. あわれみ深い人は幸い

信仰の実践的センス

イエスは、神のあわれみを受けるだけではなく、人に対してあわれみを示し、つねに神のあわれみにつつまれる恵みを、幸いという祝福の形で言い表しました。山上の垂訓での真福八端と呼ばれる幸いの五番目は、「**あわれみ深い人々は幸いである、その人たちはあわれみを受ける**」という教えです(マタイ5・7)。これは、あわれみ深い人が、あわれみを受けるから、幸いになるという意味ではありません。神のあわれみを受けている者が、あわれみ深くあろうとすることのできる「幸い」を贅えているのです。わたしたちは、十字架のあがないによって神のあわれみをすでに受けているので、あわれみ深い者となることができ、そのために努力することができるのです。神はそのようなあわれみ深い人に、いっそうあわれみを注がれるのです。

人は、あわれみ深くなればなるほど、神に似た者となります。あわれみ深い人とは、自分の周囲にいる、自分が助けるべき、最も小さい人に気づき、その人を隣人と思う以上に、行動で隣人となる人です。思うだけでなく、実際に具体的な行動ができる人です。善きサマリア人のたとえ(ルカ10・25～)で、サマリア人が示した、あのこまやかで、徹底した親切な行動を思い出してください。ヨハネの手紙では、「**世の富を持ちながら、兄弟が必要な物に事欠くのを見て同情しない者があれば、どうして神の愛がそのような者の内にとどまるでしょう。子たちよ、言葉や口先**

だけではなく、行いをもって誠実に愛し合おう」(一ヨハネ 3・17) とあります。生活の中で、他人の必要に目を留め、あわれみを行動でもって豊かに表わすように努めましょう。

7. 放蕩息子の父親の喜び

信仰の救済的センス

放蕩息子のたとえ(ルカ 15・11～)を思い出しましょう。受けるはずになっている遺産の配分を受け取って、遠い国に旅立ち、身をもちくずし、財産を無駄使いした息子というのは、神の似姿として創られた人祖がその恩恵を失った状態を暗示しているようです。言ってみれば、あらゆる時代の人間のことであります。父親のもとを離れた息子は、もう自分には子としての資格がないことを認めていました。さて、放蕩息子の父親の喜びはどこにあるのでしょうか。放蕩息子が家に近づいてくるのを見たとき、父親は「あわれみに思い、走り寄って首を抱き、口づけを浴びせ」ました。「いなくなったのに見つかった」と言って祝宴を開きます。この父親の深い喜びは、失われたかに思えたわが子の、神の似姿としての人間の尊厳が損なわれず、守られたことを知ったことにありました。自分の所有するものが見つかったことを、自分のために喜ぶのではなく、相手が無事にもどり、相手の善さが失われなかったことを、相手のために喜ぶのです。いのちの与え主である、神の父性からわき出る愛が、ここにあります(「いつくしみ深い神」6)。父なる神は、自分のこどもたちに愛を注がないではいられない方であり、しかも、人間が愛を受けるにふさわしくないときにこそ、人間に愛が必要だから、愛を注ぐのです(「いつくしみ深い神」2)。回心は、神の無限の愛といつくしみが、人間の心に注がれ続けていることの証拠です。わたしたちも神の子として、いつでも御父のもとに立ち返り、御父の喜びとさせていただく恵みを感謝しましょう。

8. 御父のように完全になりなさい

信仰の統合的センス

ファリサイ派や律法学者の義にまさる義について、ルカは「御父のように、いつくしみ深く
なりなさい」(ルカ 6・36) というイエスのことばで締めくくりましたが、マタイでは、「父があわれみ深いように、あわれみ深い者となりなさい。」(マタイ 5・48) と言われています。「完全な者になる」とは、ギリシャ語で「完成する」とか「成し遂げる」という動詞が使われています。イエスが十字架で息を引き取る前に言われた「成し遂げられた」(ヨハネ 19・30) でも使われています。その名詞形(テロス)は、成し遂げるべき目標とか、目的という意味です。イエスは、御父のみ旨を果たすという目的を、自分のいのちをささげるといふ究極のかたちで「成し遂げられた」、果たされた、ということになります。ですから、「完全な者になる」とは、罪のない完璧な人間となることを目指すことではありません。神の似姿として創造された人間の目的、すなわち神の愛を受けるにふさわしい者となるために、何事も、愛を動機に、愛を目的にして識別し、できることは何でも、すべてやりつくすということです。人を愛し続けること、これが、ファリサイ派や律法学者の義にまさる義なのです。だから、パウロは言います。「互いに愛し合うことのほ
かは、だれに対しても借りがなくてはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです」(ローマ 13・8)。「すべてのキリスト信者は、キリスト教的生活の完成と完全な愛に至るように召されている」のですと、第二バチカン公会議教会憲章 40 で述べられています。わたしたちは、あらゆる機会に、だれに対しても、真心をもって、愛のわざを行い続けましょう。

9. 自分を正当化しない

信仰の批判的センス

イエスが求める「心の貧しさ」(マタイ 5・3)とは、神への全幅の信頼を持ち、自分のみじめさを知り、罪人であることを認め、神の助けを必要としていることを自覚することです。ファリサイ派や律法学者のあやまちは、みずから義人と思いががるばかりか、狭量な考えで、罪人を神の救いの対象から締め出したことでした。そのような態度の人々にイエスは、「**わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである**」(マタイ 9・13)と明言しました。そして、「もし、『**わたしが求めるのはあわれみであって、いけにえではない**』(ホセア 6・6)という言葉の意味を知っていれば、**あなたたちは罪もない人たちをとがめなかったであろう**」(マタイ 12・7)と叱責しました。神の前で、自分を正当化しないという謙遜を身につけることでしか、神のあわれみを理解することはできません。神の心を喜ばせるのは、みずから義人と思いががるのではなく、謙虚に回心することです。人間は、神のあわれみを受けているから、神の前で自分を正当化する必要はなく、反対に、あわれみに値しない己の醜さを素直に認めなければなりません。

教皇フランシスコは、信徒が互いにいがみ合い、裁き合うことを嘆いておられます(「大勅書」14)。いつくしみの特別聖年にこそ、わたしたちも、自分たちの教会の信徒同士のかかわりを反省して、「**皆心一つに、同情し合い、兄弟を愛し、あわれみ深く、謙虚になりなさい**」(1ペトロ 3・8)というみことばを、よく味わい、それぞれの共同体で実行しましょう。

10. いつくしみの相互関係

信仰の共同体的センス

いつくしみの特別聖年の祈りには、「**あなたは、ご自分に仕える者が、弱さを身にまとい、無知と過ちの闇の中を歩む人々を、心から思いやることができるようお望みになりました。これら仕える者に会うすべての人が、神から必要とされ、愛され、ゆるされていると感ずることができるよう**」という一節があります。この祈りの部分は、ヘブライ書の「**あわれみ深い、忠実な大祭司**」(ヘブライ 2・17)であるキリストが、その模範とされています。わたしたちは、あわれみ深いキリストに「仕える者」として、人間としての弱さを身にまといながらも、周囲の「無知と過ちの闇の中を歩む人々に」対して、いつくしみの態度を取るよう励まされます。その上で、そのようなわたしたちに出会う人々が、「**自分は、神から必要とされ、愛され、ゆるされていると感ずることができるよう**」と、その人々のために、神からの愛を祈るのです。教皇フランシスコの深い示唆にあふれた謙虚な祈りです。

いつくしみ深い愛は、人と人との相互関係のなかで体験されるもので、けっして相手に対して一方的な行為として実行されるものではないのです。一方だけが与え、他方が受け取っているように見えても、そこには見えない相互の交わりが生まれています。たとえば、ボランティアを行う人は、援助する相手の方から、期待しない喜びをもらっています。与える人が、受ける人になっているのです。パウロは言います。「**あなたがたに幾らかでも、キリストによる励まし、愛の慰め、“霊”による交わり、それにいつくしみやあわれみの心があるなら、同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、わたしの喜びを満たしてください**」(フィリピ 2・1~2)。わたしたちも、いつくしみを人に施すときに、自分も神のいつくしみに与っている喜びを味わいましょう。

11. 聖霊の導きにゆだねて人をゆるす

信仰の聖霊論的センス

『主のいのり』の中で、「わたしたちの罪をゆるしてください。わたしたちも、人をゆるします」と祈ります。わたしたちが人をゆるす「ように」、神のゆるしを願いながら、わたしたちが人をゆるすことを誓っています。この「ように」は、「**あなたがたの父があわれみ深いように、あなたがたもあわれみ深い者となりなさい**」(ルカ 6・36) や、「**天の父が完全であるように、完全な者となりなさい**」(マタイ 5・48)、また、「**わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい**」(ヨハネ 13・34) というイエスのことばに出てきます。いずれも、御父と御子が手本となり、命じられています。

わたしたちが、罪のゆるしをねがい、告白するとき、御父からあわれみの愛があふれ出ますが、自分を侮辱した人に対して心を開かないかぎり、あわれみのこの流れは、わたしたちの心までたどりつくことはできません。わたしたちが人から受けた侮辱やその心の傷を乗り越えていくには、自分自身を聖霊にゆだねるしかありません。人間は、聖霊のはたらきのもとに罪を痛悔し、回心して、罪を告白することができるのです。わたしたちは、パウロが言うように、「**霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう。うぬぼれて、互いに挑み合ったり、ねたま合ったりするのはやめましょう**」(ガラテヤ 5・25～26)。互いにあわれみ深く、ゆるし合うために、聖霊の導きに自己をゆだねて、霊の実(同 5・22)をむすぶ素直な心にしていただきましょう。

12. マリアとともに心の巡礼を

信仰のマリア的センス

「教会の祈り」の晩の祈りで、福音の歌 マリアの歌(ルカ 1・46～55)を唱えます。

わたしは神をあがめ、わたしの心は神の救いに喜びおどる。

神は卑しいはしためを顧みられ、いつの代の人も わたしを しあわせな者と呼ぶ。

神は わたしに偉大なわざを行われた。

その名は とうとく、あわれみは代々、神をおそれ敬う人の上に。・・・

マリアは、神の子を宿すという自分に与えられている誉は、けっして自分自身によるものではなく、卑しいはしためを顧みられた神のあわれみによるのだと賛美します。

いつくしみの特別聖年に、マリアのような信仰と謙遜を願い、わたしたちも神のいつくしみを賛美しましょう。これまで、わたしと、わたしとかかわりのある人々の生活の中で、かくれた仕方でも、力強く働かれた神に感謝し、いまでも、これからも、いつくしみの業を続けてくださる御父への信頼と希望をもって、マリアとともに、救いの門である御子のいつくしみの扉に向かって、心の巡礼をしましょう。

2016年1月1日 神の母聖マリアの祝日

カトリック京都司教
+パウロ大塚喜直